

	<p>エッセイ</p> <h2 style="text-align: center;">ベトナムより国産車</h2> <p style="text-align: center;">sce-net 神田 稔久</p>	<p>E-52</p> <p>発行日 2013.8.18</p>
---	--	--------------------------------------

今年（平成 25 年）の 8 月号の「化学工学」に、科学関連産業のグローバル化に関して、キューピー（株）さんの中国におけるビジネス展開の例が紹介されていました。

それまで殆ど認知されていなかったマヨネーズを、味を中国人の好みに合わせ、サラダを食べる習慣の無い中国人に饅頭に付けるなどの新しいレシピを提供し、現地の気候に合わせた商品設計などを行い、中国におけるマヨネーズの定着・発展に成功したとのことでした。

事例は異なりますが、私の話は、マレーシアで、都市ガス供給事業と地域冷房事業推進の支援をしていた時の話です。

1994 年当時のマレーシアは、ボルネオ島に産出する天然ガスは外貨獲得のため LNG として日本などに輸出、半島東岸に産出する天然ガスは国内産業の発展に利用するという国策が定められていました。

そのような状況の中で、当時のマハティール首相の強い指導力のもと、近代化を志向する天然ガス化路線が進められ、マレーシア最初の都市ガス供給事業が事業開始直前の状況でした。熱帯地域では都市ガス供給事業の運営は難しいと考えられている中での立ち上げで、家庭用需要を中心として発展してきた日本の都市ガス事業とは異なり、工業用需要を中心として立ち上げて行く方針のもとで顧客の開発やガス導管の建設が進んでいました。

一方、同時期に、現在クアラルンプールの空にそびえるツインタワービルの建設や、現在クアラルンプール国際空港として使用されている新ハブ空港の建設計画が持ち上がり、ここに地域冷房を採用することが決定されました。当時、地域冷房は、東南アジアでは小規模なものがシンガポールにあるだけの状態で、都市ガス供給事業と同様、マレーシアの関係者にとっては、いずれもが初めて経験するものでした。

この両プロジェクトの推進に、東京ガスが出資も含めて技術支援することが実現し、私も、その一員として事業推進に参加することになりました。

マレーシアは熱帯地方にあって気候が一年中変わらないために季節感が無く、何時の頃かというのが記憶しにくい所ですが、1994 年の秋頃だったと思います。地域冷房設備の構成を議論している時、カウンターパートの国営石油会社ペトロナスの副社長が、突然、「我々

はメルセデス（ベンツ）は要らない。我々が欲しいのはプロトン（三菱自工がマレーシア企業と合弁で開発した国産車）だ。」と発言しました。

その発言の趣旨は、「日本的な安定供給のための二重三重の設備は必要ない。冷房が止まれば、冷房の無かった昔に戻れば良いではないか。現地に適合したプロトンの自動車のように、安くて実用的な身の丈に合ったシステムが必要なのだ。」と言うことでした。我々は、万全を期して、絶対に供給中断の起きないように、設備構成の多重化を提案したのですが、一蹴されました。

日本企業は、海外において日本的システムの押しつけが強すぎることが言われますが、それに対する警鐘でした。

副社長の発言を聞き、「その国の実態に合わせて柔軟に対応して、真に必要なものを安価に作りあげる。」ことの必要性を痛感しました。

当時は Localization という考え方も言葉もない時で、関係した日本人スタッフの中でも意見が割れ甲論乙駁がありました。

現在は、先人たちの労苦が伝承され、Localization という言葉も社会的地位を占め、日本企業が海外進出を考える上での重要な項目になっていることに安心しています。

そのような経緯を経て、私の帰国後に、ツインタワービル、新空港がオープンしましたが、その後一度も冷房に関する大きなトラブルを起こすことはなく、私も毎年のように訪れていますが、快適な冷房を楽しんでいます。

皆様も、クアラルンプール国際空港を利用された時や、近代的なショッピングモールのあるツインタワービル（現地ではKLCCと呼んでいます。）を訪れた時に、この話を思い出して頂ければ幸いです。

クアラルンプール中心部（右端がツインタワービル）

